

都市の時代のランドスケープアーキテクト像

Being a Landscape Architect in the Urban Age

金香 昌治 *Shoji KANEKO*

(株) 日建設計都市デザイングループ公共領域デザイン部
Integrated Public Design Studio, Urban Design Group, Nikken Sekkei Ltd.



都市の時代とランドスケープ

21世紀に入ると世界各地でますます都市化が進み、2010年時点で世界の都市人口は40%に達し、2050年には約70%が都市に暮らすと言われている。経済・社会・環境的側面から持続可能性を追求した「スマートな都市化」は、いまや世界が国境や分野の壁を越えて取り組むテーマである。

一方、日本においては人口の少子高齢化が進み、2015年の国勢調査では初めて人口減少に転じた。都市デザインの動向は、従来の効率性優先の成長志向型から、自然との共生を図りながら賢く集約化させる環境調和型へと移行しつつある。世界に先駆けて成熟社会に突入した課題先進国として、都市機能を保持しつつ生活者の快適性やライフスタイルの豊かさを追求する先進都市モデルを世界に向けて発信していく重要なミッションに挑戦する時代に入った。

国内外において都市が直面する課題は様々だが、成長、更新、縮小といった如何なる潮流においてもランドスケープアーキテクト（以下LA）の活躍は大きなカギとなる。その理由は主に3つあると考える。1つ目にLAが、構築環境を科学と芸術の両面から扱うデザイナーであり、都市計画や建築といった近接分野をつなぐバランスとして重要であること、2つ目にLAが「自然」というこの世で最も長い時間軸のなかで考えるべきものを主なデザイン対象とし、都市の長期的な成長戦略を支えるフレームワーク構築に寄与できること、そして最後に、LAが市民の日常生活における人的交流やアクティビティの受け皿となる公共（外部）空間をデザインする唯一の「アーキテクト」であることだ。

本稿では、上記3つの視点を通して、これからの時代に求められるLA像について考えてみたい。

都市計画×ランドスケープ×建築の三位一体

私がランドスケープに興味を持ったのは大学時代に建築設計を学ぶなかで、建築を含む都市環境をより面的に捉えたいと思ったことがきっかけである。建築と関連してランドスケープ「デザイン」を学びたいと思ったが国内にはそうしたデザイン教育の場はなく米国大学院留学を決意した。私が通ったワシントン大学は College of Built Environment という学部

に都市計画、建築、ランドスケープの3学科が所属し、一つ屋根の下でデザイン教育を受ける。「Built Environment」即ち「構築環境」はそれら3分野の統合によって構成されるという理念に基づき、3学科の生徒が自由に参加できる共同デザインスタジオや、2つの修士を並行して取得できる Dual Degree プログラムも充実している。「建築からランドスケープ」、「ランドスケープから都市計画」と途中でコースを変える生徒も珍しくない。米国には、都市計画や建築と並列でランドスケープを学べる大学が多数あるが、こうした教育システムがLAの業界における立ち位置の確立に大きな役割を果たしてきたのは間違いない。大学院修了後、約7年在籍したシアトルのランドスケープ設計事務所 Gustafson Guthrie Nichol では、多くの建築家、専門家との協働を通して、近接分野へのリスペクトの重要性や、多様性を受け入れ、それらを掛け合わせるコラボレーションこそが新しい価値創造には肝心であるという、デザインに取り組む上での基本姿勢を教わった。

2012年に帰国後、(株)日建設計に入社。日本で働いたことがなかった私にもある程度予想はできていたが、デザインの現場におけるLAの地位の低さに初めはがっかりした。日本の場合はランドスケープ専門家の多くがデザイン系の出身ではないのが一因かもしれない。元々 Landscape Architecture という学問の「Landscape」の後に「Architecture」とついているのは、20世紀初めにオルムステッドが「ランドスケープは建築分野に寄り添ったデザインの学問として発展すべきだ」とした思いに由来するとされる。よって日本の教育について言えば、建築や都市デザインの学生にもっとランドスケープの世界に触れる機会を与え、「landscape」を「Architecture」と結びつけた「デザイン」として学べる場が増えていくことを期待したい。実務社会においては、まずは建築をはじめ近接分野との歩み寄りが不可欠であろう。教育の現場や学会、専門家会議がより幅広い聴衆に対して開かれ、グラフィック、メディア、工業、テクノロジー、アートといった様々なデザイン関連分野と共に日本らしい構築環境のあり方について議論する場が活性化していくことも重要であると思う。

今後、日本の建設業界においてはアイコン的な建築を新たに創造する仕事より、既存のストックを生かしながら都市

のシステムを編集していく仕事のほうが増えていくであろう。そうしたアプローチは元々 LA が得意とする部分である。過去と未来、人と自然、建物の内外をつなぐ視点で LA が果たせる役割は大きいはずである。今後益々必要となる専門性を集結した共創型のデザインプロセスにおいて、多様な意見を収斂させていくバランス（調整役）として LA の存在価値を見出していければランドスケープの未来は明るい。

ランドスケープ第一主義のマスタープラン

2015 年からシンガポールのレールコリドーという国土の中央を縦断する長さ 24km にも及ぶ鉄道廃線跡地をパブリックスペースへとリノベーションするプロジェクトに従事している。シンガポールは早くから故リー・クアンユ-元首相指導のもと「City in a Garden」という自然環境を核に据えた都市成長戦略を掲げており、レールコリドーも国の健全な成長に重要な国家プロジェクトに位置付けられている。国際コンペとしてマスタープラン提案募集がなされることを知った我々は、社内で海外経験豊富な若手を集め、ランドスケープを中心とした都市デザイン、建築、クリエイターからなる領域横断チームを特別に組成した。地元のパートナーとして、ランドスケープ、建築、土木、構造、エコロジー、サイン、照明、アート、積算などの専門家をそれぞれ選定し、グローバルとローカルな視点を持ち合わせた学際的なチームで臨んだ結果、世界 64 チームのなかから勝者に選ばれた。

国家にこれほど大きな方向性を与えられるランドスケープの仕事にはなかなか巡り会えないと気を引き締め、チーム一丸となって約 2 年間、シンガポールの歴史、自然、文化はもちろん、24km に渡るコリドー沿いの土地利用、人口動態、公共交通、地形、生態系など固有のコンテキストを丁寧に読み解きながら、ランドスケープを長い時間軸のなかで更新される大きなシステムとして捉えることを意識して計画を進めてきた。その過程で最も印象的であったのは、シンガポールという資源に乏しい小さな都市国家だからこその公共空間整備にかかる政府の本気度である。例えば公園整備については、「2030 年までに国民の 90% が徒歩 10 分圏内で公園にアクセスできることを目指す」といった具体的な目標と共にオープンスペース・マスタープランが公表されている。水、緑、公道や自転車道ネットワークについても同様である。政府の強いリーダーシップのもと、地元の民間企業や専門家、大学や市民とともに一体感を持って様々な公共プロジェクトが推進されている。LA が都市デザインの主役になれる社会環境が整備されているのである。

日本においては、政策が一般市民にも分かり易く都市空間論的な観点から掲げられることは少ない。開発諸制度における空地や緑化の基準についても画一的に「量」を確保すればよいというだけではなく、それが周辺の文脈や生態系、都市生活者にどういった効果をもたらすのか、より長い時間軸に

おけるデザインの「質」が重視されるように問題提起していくこともこれからの LA には求められる役割であろう。

これからの公共領域デザインの担い手として

近年、日本でも盛んに「パブリックスペース」という言葉を耳にするようになった。ライフスタイルの変化と共に市民自らがまちにコミットしてゆく感覚が緩やかに社会の成熟と共に伝播しつつある。そうした現代社会においては都市の「図と地」でいう「地」の部分にどれだけアクティビティを受け入れる包容力があるかで都市の魅力は大きく違ってくる。つまり、太陽、緑、水、空気といった人間が健康に暮らす上で不可欠な自然要素を五感で感じながら屋外で好きなだけ思い思いの時を過ごせることは、都市の住みやすさに直結する。我が国においては、「図」となる私的空間のデザインの質は高いが、「地」となる公共領域のデザインについては、とても十分とは言えない。では、それをデザインするのは誰なのか。恩師の一人、キャサリン・グスタフソンの名言の一つに“Sky is Mine”という言葉がある。建物を一歩出た瞬間に身を置く、「空の下の空間」はランドスケープのデザイン領域であるというメッセージである。屋外空間のデザインは建築家には触れさせない、そうした彼女の LA としてのプライドと責任、厚かましいくらいのデザインに対する食欲さからは見習うべき点が多い。

先日、柏の葉でデザインを担当した調整池「アクアテラス」がオープンした。元々フェンスで周囲を囲まれていた調整池を住民の憩いの場へと更新する仕事である。調整池は日本では「土木」の世界とされ、デザインが介入しづらいようであるが、デザイナーの起用を重要視してくれたクライアントの思いから実現できた。実際にこんな水辺空間が自宅の近くにあったらなんて贅沢かと思えるくらい素晴らしい環境に生まれ変わった。自分が思い描いた通りの空間で子供が笑顔で楽しむ様子を見る瞬間ほどランドスケープの仕事をしていて良かったと思うことはない。

今後はこうした既存インフラの機能更新やブラウンフィールドの土地利用転換に伴った公共領域を、市民のための交流空間としてリ・デザインしていく機会は増えていくであろう。そうした機会には食欲に手を挙げ、そのデザインにコミットしていこう。LA は屋外空間のデザインを専門にする唯一の「アーキテクト」なのだから。

(略歴)

ランドスケープアーキテクト (RLA, LEED AP BD+C)

(株) 日建設計公共領域デザイン部主管。2003 年京都工芸繊維大学卒業 (建築設計)。2005 年ワシントン大学大学院にて Landscape Architecture 修士号 (MLA) 取得後、2005 年～2011 年まで Gustafson Guthrie Nichol 社勤務。2012 年に帰国し、(株) 日建設計入社。